



PEACEBOAT  おりづるプロジェクト

ヒバクシャ地球一周 証言の航海

Global Voyage for a Nuclear-Free World
PeaceBoat Hibakusha Project

ピースボート

〒169-0075

東京都新宿区高田馬場 3-13-1-B1

TEL03-3363-7561 FAX03-3363-7562

2018年8月21日

第98回ピースボート「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」 おりづるプロジェクト2018 プロジェクトの概要とその成果

- クルーズ 第98回ピースボート「地球一周の船旅」
- テーマ 「核兵器の禁止から廃絶へー市民の力で進めようー」
- 期間 2018年5月8日(火)～2018年8月21日(火) 横浜発着 計106日間
- 寄港地数 22カ国 25寄港地
- 使用客船 オーシャンドリム号
- 参加者
 - 被爆者 2名(内訳:広島被爆1名/長崎被爆1名) ※参加被爆者は「非核特使」に委嘱
広島被爆:上田 紘治 長崎被爆:倉守 照美
 - 被爆二世 1名 品川 薫(広島) ※参加被爆二世は「非核特使」に委嘱

- 証言活動 15カ国 18都市にて実施
- 後援 広島市/長崎市/平和首長会議/日本原水爆被害者団体協議会
公益財団法人広島平和文化センター/公益財団法人長崎平和推進協会
- プロジェクト通称 おりづるプロジェクト
- 主な活動と成果

- ①核兵器禁止条約への署名・批准を各国に求め、核兵器禁止条約発効への機運を高めた。
 - シンガポール、ギリシャ、ノルウェー、アイスランド、カナダなどで政府高官や地方議会等に核兵器禁止条約への賛同を要請。
 - ニューヨークにてメキシコ、オーストリア国連大使館大使代表部を訪問。
 - メキシコのプエルトバジャルタ市が平和首長会議に加盟。
 - ヒバクシャ国際署名を計684筆集める。
- ②世界のさまざまな戦争被害者や核被害者との連帯活動を展開した。
 - シアトルにてプルトニウム精製の原子炉の放射能汚染被害者(通称風下住民)と交流。
 - オーシャンユースやSDGsユースたちといった各国の若者たちと海洋問題や持続可能な開発に関して交流。
 - 中国、韓国、マレーシア、シンガポールなどアジアからの多数の乗船者と交流。
- ③ピースガイドが次世代の活動の可能性を広げた。
 - 被爆体験の継承と核なき世界に向けて活動する「おりづるピースガイド」の養成講座を実施。16名が修了。今後、原爆や平和に関する活動に取り組む。

■参加被爆者 略歴

■被爆者

| | |
|---|---|
|  | <p>上田 紘治(ウエダ・コウジ) 広島被爆 1942年2月15日生まれ 被爆当時3歳 東京都八王子市在住 爆心地から400mにあった自宅の被害状況を確認するため母と入市し被爆。東京被爆者団体元事務局次長。八王子被爆者団体元事務局長。2003年ワシントンDC、2005年NPT会議へ参加し同年、ロス・アラモスを訪れ核爆弾製造工場を見学。2010年NPT会議に参加し市民へ被爆の実相を伝えた。国内では小学生から大学生、留学生、各団体に被爆の実相を話している。</p> |
|  | <p>倉守 照美(クラモリ・テルミ) 長崎被爆 1944年1月8日生まれ 被爆当時1歳 長崎県長崎市在住 爆心地から5.8kmの地点で被爆。母親と幼い兄姉と一緒に防空壕へ避難していたため無事。被爆当時1歳であり記憶はないが、「長崎を最後の被爆地に」という思いから多くの活動に尽力してきた。2017年の3月には高校生1万人署名の高校生たちと在韓被爆者と被爆証言や交流・意見交換などを行った。</p> |
| <p>■被爆二世</p> | |
|  | <p>品川 薫(シナガワ・カオル) 広島被爆二世 1950年6月10日生まれ 広島県広島市在住 広島市ボランティアガイド 当時タバコ工場で勤務していた母(当時25歳)が爆心地から2km地点で被爆。これまで当時の話を聞く機会がなかったが、現在広島市のボランティアガイドとして原爆の恐ろしさや平和への尊さを改めて感じ、修学旅行生や外国人に広島市の原爆当時の街を案内している。</p> |

※出航時(2018年5月8日)の年齢を記載しています。

● 寄港地での活動

5月18日 シンガポール

活動都市:シンガポール

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(外務省へ訪問)

外務省の核拡散防止、核と安全保障部門の担当官 Teo Tze Erm さんとの面会、核兵器禁止条約への署名と批准を要請する。

代表して上田紘治さんが被爆証言を行い、核兵器禁止条約の必要性について話をする。

シンガポールの寄港で初の外務省訪問ということで、Teo さんからは「被爆者が核廃絶へ向けて伝えていくことが核廃絶へ近づく」とお話をさせていただく。

5月23日 コロンボ(スリランカ)

活動都市:コロンボ

発言者:倉守照美さん(外務省へ訪問)

外務省の事務次官の Prasad Kariyawasam さんと面会、核兵器禁止条約への署名・批准を要請。

外務事務次官の「スリランカは核を持たない国としている。核も原発も持たない国として、民衆の力から政府を変えていくことが必要」と言われた。



6月5日 サントリーニ島(ギリシャ)

活動都市:サントリーニ島

発言者:品川薫さん・倉守照美さん(小学生に向けての証言会／約30名)

ICAN パートナー団体核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の Maria Arvanti Sotiropoulou さんの受け入れにより、地元小学校を訪問し、児童に被爆証言を伝える。

被爆者の体験を初めて聞いた子どもたちは、驚きつつ、真剣に話を聞いてくれた。

6月6日 ピレウス(ギリシャ)

活動都市:ピレウス

発言者:上田紘治さん(国会議員に向けての意見交換会／約30名)、上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(首相官邸へ訪問し面会)

国会議員に向けて証言会を行い、核兵器禁止条約に関する意見交換会を実施。その後、首相官邸にてチプラス首相と面会。被爆者への敬意を示す言葉をもらうとともに、「ギリシャが平和な一歩・核のない一歩を歩めるようにしていきたいです。」との発言があり。

また、官房長官とも面会し、質疑応答の時間を設ける。原爆が落とされたという出来事に対しては戦争犯罪であると個人的見解を示し、核のない世界を目指すとのこと。



6月9日 カリアリ(イタリア)

活動都市:カリアリ

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(市民への証言会／約200名)

ICAN イタリアの Lisa さんの受け入れにより記者会見と証言会イベントを実施。

証言会イベントでは、サルディーニャ島の市議会がイタリア政府に核兵器禁止条約に署名・批准を求める決議を採択するためのものであり、市民が政府に訴えていく力を見る。

サルディーニャ島が核の廃棄物場にされることを防ぐためにも被爆者と共に力を合わせて働いていきたいとの話を受けていく。

6月14日～17日 パリ(フランス)

活動都市:パリ ※リスボンから船を一時離脱

代表団:上田紘治さん、倉守照美さん

1日目はICANパリの方々や平和首長会議の方々が歓迎。2日目は3名の上院議員の方との面会。環境団体の財団主催の記者会見に参加。被爆体験や今の世界の核に関する状況について聞かれ話をする。その後ラジオ出演をし、核兵器禁止条約について聞かれる。3日目は新人の女性議員の方と面会し意見交換を行う。

6月17日 フランス(ル・アーブル)

活動都市:ル・アーブル

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(船内での証言会／約20名)

ICANフランスのJean-Marieさんの受け入れにより、船内にて証言会を実施。地元の子どもたちも多く訪れていた。その子どもたちは平和首長会議に加盟している国の子ども。

質疑応答の時には子どもたちから「今は広島に放射能があるのか?」「アメリカを憎んでいるのか?」など質問がある。また、ICANフランスに所属している最年少のPaburoくんから学校の友人と核について話し合うことで意識を変えていくことができると話をされる。

6月26日 スtockホルム(スウェーデン)

活動都市:ストックホルム

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(ランチ会談／6名)

ノーベル博物館に行き、見学。その後ICANパートナー団体のIPPNWの方々とは昼食会。

昼食をしていく中で核兵器禁止条約に関心や批准をさせていくためには、被爆者の体験こそが必要不可欠なものになっていくと言われる。また、スウェーデン市民の核兵器禁止条約への興味関心を伺うと日本とそんなに変わらないことが分かる。市民から意識を変えていくということの必要が大切だと再認識する。

6月28日 コペンハーゲン(デンマーク)

活動都市:コペンハーゲン

発言者:倉守照美さん(国会議員との面会／5名)

外交委員会の国会議員と面会。倉守さんが長崎被爆の谷口稜暉さんの赤い背中が掲載されている新聞を持ち、被爆証言とスピーチを伝える。

国会議員の方々はICANの議員署名をし、核廃絶へ向け、中心議員が核兵器禁止条約に署名・批准をしていくよう呼びかけると話をする。

6月30日 ベルゲン(ノルウェー)

活動都市:ベルゲン

発言者:倉守照美さん(ベルゲン副市長との面会)

ベルゲン副市長の Erlend Horn さんと面会。ベルゲン政府の核兵器禁止条約への考えを聞く。ICAN サポーターの IPPNW の方から「ノーベル平和賞を受けおってる国として、核兵器禁止条約に署名も批准も出来ないのは恥ずかしい。」という一言をもらい、市民レベルでまず政府を動かすことの大切さなど共有し、有意義な意見交換会になる。

7月4日 レイキャビク(アイスランド)

活動都市:レイキャビク

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(外務省へ訪問し外務大臣と面会)

上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(外交委員会の方と面会)

外務省へ行き、外務大臣との面会。

水先案内人であり ICAN サポーターの Scott Ludlam さんは「核なき世界を目指していくためにアイスランドの参加が重要」と核兵器禁止条約への署名・批准を呼びかける。

次に外交委員会の方々との面会。



7月10日 ハリファックス(カナダ)

活動都市:ハリファックス

発言者:品川薫さん(船内にて証言会／40名)

ICAN サポーターの MAC (Mines Action Canada) の Erin Hunt さんの受け入れにより船内にて証言会を実施。議員やジャーナリストの方々を招いた。

外務省の事務官の Matt Decourcey さんからは、MAC の Erin さんの活動やサーロー節子さんのスピーチなど核のない世界を目指して活動していく運動について評価していくべきとのお話を受ける。

7月12日～13日 ニューヨーク(米国)

活動都市:ニューヨーク

発言者: 上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(メキシコ国連代表部大使、オーストリア大使館大使と面会)、上田紘治さん(証言会イベント／30名)

12日はメキシコ国連大使館大使との面会。ノーベル平和賞メダルと賞状も披露。核兵器の非人道性について話をさせていただく。次にオーストリア国連大使館大使と面会。アメリカに住んでいる日本人や平和団体の方向けに証言会を実施。ともに、核のない世界を目指すと話をする。

13日は9.11トリビュートミュージアムへ訪問。遺族が残した博物館にて、生存者のペーターさんと面会し、案内と証言を聞く。紙一重の差で生死が分かれた話を聞き、被爆者と重なる部分があると共感しあうことができた。

7月17日 ハバナ(キューバ)

活動都市: ハバナ

発言者: 上田紘治さん、倉守照美さん(国際高等学校で証言会／約200名)

国際高等学校にて学生、キューバ大使、国連協会の方、平和団体などの方々に向けて証言会を実施。核の専門家より「核兵器はいかなる安全保障であっても許してはいけない」といった強い言葉をいただく。その他、平和団体の代表の方や国連協会の方などからキューバが核兵器禁止条約に批准したということを誇りに思うとともに、被爆者と共に核のない世界を目指していくとお話をいただく。



7月22日 カルタヘナ(コロンビア)

活動都市: カルタヘナ

発言者: 品川薫さん(船内にて証言会／約40名)

GPPAC(紛争予防のためのグローバルパートナーシップ)ラテンアメリカの受け入れにより船内に学生約40名を招き証言会を実施。紛争により家族や身内が被害にあった学生たちが平和団体を通して地域や同年代の人たちとの横のつながりを大切にしているということを知る。水先案内人の Carlos Jose Honzalez さんからは「これからの世代は紛争のない世の中を生きていく中で若者たちが世界を作っていく」という話をさせていただく。

7月23日 クリスタバル(パナマ)

活動都市: クリスタバル

発言者: 上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(外務大臣と面会／7名)

外務省へ行き外務大臣と面会。

核兵器禁止条約にまだ批准をしていないことを指摘。9月26日の国連での核兵器禁止条約への署名式の時には批准を間に合わせるように努力するという返答があり。

7月26日 プンタレナス(コスタリカ)

活動都市:コスタリカ

発言者:上田紘治さん、倉守照美さん、品川薫さん(大学にて証言会／約200名)

コスタリカで最大の大きさを誇る私立大学にて証言会を実施。生徒約 200 名の中で証言会を実施。

被爆者 1 人 1 人がスピーチを行う。長崎被爆者の倉守さんからは「放射能は子や孫の世代までに影響していく、許されるものではない」と話をしていく。参加した生徒からは多くの質問が出て、「核のない世界を作るために市民社会が出来ることはなにか?」「核保有国についてどう思うのか?」といった質問が出てきた。核兵器禁止条約に批准している国として生徒の興味関心の強さについて触れることが出来た。



8月7日 シアトル(米国)

活動都市:シアトル

発言者:倉守照美さん(B 原子炉職員に向けて／12名)

長崎の原子爆弾のプルトニウム精製していた原子炉へ訪問。世界で最初の原子炉を作ったという原子炉へ訪問し、館内の見学。そして、職員に向け証言会を実施。質疑応答の時には、「原爆を落としたアメリカについてどのように日本で教育がされているのか。」「放射能の影響はどのようなものがあるのか」といった質問が来た。また、原子炉からの放射能の影響で被曝した風下住民(ダウンウインダー)のトム・ベイリーさんとお会いしトムさんの体験を聞く。日本とアメリカ両国の被爆者ということで濃い時間を過ごせた。

【その他の寄港地】

基隆(台湾)、バルセロナ(スペイン)、リスボン(ポルトガル)、サンクトペテルブルク(ロシア)、ヘルシンキ(フィンランド)、ジョージタウン、プエルトバジャルタ(メキシコ)、釧路(日本)

●ヒバクシャ国際署名

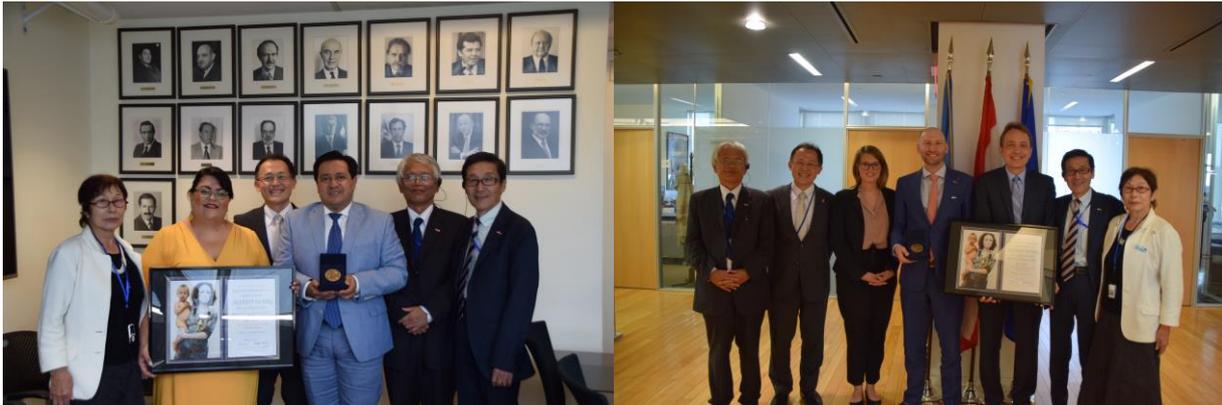
合計:684筆

【賛同して下さった主要な方々】

- ・ 東ちづるさん(女優、Get in touch 代表)
- ・ 海堂尊さん(医師、小説家)
- ・ 吉岡淳さん(カフェスロー代表、元ユネスコ協会連盟事務局長)
- ・ Garba DIALLO さん(フォルケホイスコーレの Crossing Borders 学科長)
- ・ 森元美代治さん(NGO IDEA ジャパン代表)
- ・ 八木啓代さん(音楽家、作家)

ノーベル平和賞メダル

証言・交流プログラムを行った計15カ国のうち8カ国で実施



船内での活動

《主な交流相手》

■ オーシャンユース

小島発展途上の島々からの若者活動家。気候変動や海洋汚染といった問題に取り組む。島々から若者の声の世界につながるようになっていく。自分のメッセージを伝えている。ストックホルム～ニューヨーク間乗船。国籍はシンガポール・モーリシャス島・セーシェル・パラオ・バルバドス・東ティモール・フィジー。

■ SDGsユース

平和教育と国連の持続可能な開発目標(SDGs)をテーマにしたプログラムに参加するため、若者ら計7名がプンタレナス～プエルトバジャルタ間乗船した。
国籍はメキシコ・コスタリカ・コロンビア・ボリビア・米国、ガーナ、ニュージーランド。

■ おりづるパートナー

おりづるプロジェクトに関心を持って、主体的に関わってくれる方々をおりづるパートナー(通称:おりバ)と呼称している。被爆者の方とともに、劇や合唱など、様々な企画等を通じてこの問題を知ってもらえるように、船内などで活動している。下船後も継続してその活動に携わる方もいる。

■ 水先案内人

東ちづるさん(女優、Get in touch 代表)

伊藤千尋さん(国際ジャーナリスト、元朝日新聞記者)

吉岡淳さん(カフェスロー代表、元ユネスコ協会連盟事務局長)

Garba DIALLO さん(フォルケホイスコーレの Crossing Borders 学科長)

森元美代治さん(NGO IDEA ジャパン代表)

八木啓代さん(音楽家、作家)

ほか

■ 多国籍な参加者

第98回ピースボート約1,000名の参加者のなかには、日本国籍の方以外にも、中国、韓国、台湾、シンガポール、マレーシアなど約名の多国籍の参加者が乗船した。

《企画一覧》

1. 原爆の被爆の実相を伝え理解を深める

- 証言会：「おりづる証言会～記憶のない被爆者がつなげる言葉～」(5/21)
- 展示：スエズ運河通航記念 おりづる展示会(6/3)
- 展示：ピーススペース～あなたとノーベル平和賞と記念撮影会～(6/16)
- 証言会：「おりづる証言会～8月9日のあの日、私は1歳でした。～」(6/20)
- 証言会：「私は「ピカドン」を知らない。」(7/29)
- 証言会：「広島被爆証言～核兵器の終わりの始まり～」(8/5)
- 証言会：「長崎被爆証言～記憶のない被爆者が語り継ぐ被爆証言～」(8/8)
- 発表会：「命が大切にされる社会にするために～ピースガイドと巡る8月6日と8月9日～」(8/6)
- 発表会：「命が大切にされる社会にするために～ピースガイドと巡る8月6日と8月9日～」(8/9)
- 発表会：「音と光の平和の夜」(8/12)

2. プロジェクトの意義や成果を一般参加者と共有する

- 交流会：「ノーベル平和賞メダル記念撮影会」(5/11)
- 紹介企画：「チーム紹介企画」(5/14)
- 紹介企画：「はじめまして、おりづるプロジェクトです。」(5/15)
- 交流会：「おりパMTG」(5/16)
- 交流会：「おりパMTG」(5/20)
- 交流会：「ピーススペース」(5/22)
- 交流会：「おりパMTG」(5/24)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～アジア編～」(5/25)
- 交流会：「おりパMTG」(5/25)
- 交流会：「おりパMTG」(5/26)
- 交流会：「おりパMTG」(5/30)
- 交流会：「おりパMTG」(6/2)
- 交流会：「おりパMTG」(6/8)
- 交流会：「おりパMTG」(6/12)
- 交流会：「おりパMTG」(6/13)
- 紹介企画：「私が出会った被爆者たち」(6/16)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～ヨーロッパ編～」(6/18)
- 紹介企画：「おりづるピースガイド募集説明会」(6/21)
- 紹介企画：「おりづるピースガイドオリエンテーション」(7/2)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～北欧編～」(7/3)
- 交流会：「ノーベル平和賞メダル記念撮影会」(7/11)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～レイキャビク・カナダ・NY編～」(7/16)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～南米編～」(7/27)
- 報告会：「世界を巡るおりづる～シアトル編～」(8/11)
- 報告会：「おりづるピースガイド修了式」(8/15)

3. 戦争や被爆体験の継承について理解を深める

- 上映会：「おりづる上映会～フラッシュ オブ ホープ～」(5/19)
- 上映会：「ゼノ かぎりなき愛に」(5/25)
- 上映会：「おりづる上映会～ヒバクシャとボクの旅～」(6/3)
- 上映会：「おわりのはじまり～ノーベル平和賞のその先に～」(8/20)

4. 原発を含めた核に関する問題や平和の問題について理解を深める

- レクチャー：「ICANノーベル平和賞受賞基調講演～核廃絶への道～」(5/10)
- レクチャー：「世界が動き出す～非核への道～」(5/11)
- 対談：「ゼノ かぎりなき愛に～アフタートーク～」(5/25)
- レクチャー：「ぶっちゃけ、げんばくってなに？」(5/27)
- レクチャー：「オバマススピーチを聞こう」(5/28)

- 対談：「ジャングル大帝レオ悪夢編上映会とアフタートーク」(5/29)
 レクチャー：「ハムの日ってなに？」(6/15)
 対談：「ICANノーベル平和賞受賞式のお話～核兵器の終わりの始まり～」(6/29)
 レクチャー：「核兵器ってなに？」(7/2)
 レクチャー：「おりづるピースガイド①」(7/5)
 レクチャー：「おりづるピースガイド②」(7/6)
 レクチャー：「おりづるピースガイド③」(7/7)
 レクチャー：「おりづるピースガイド④」(7/8)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑤」(7/9)
 対談：「米朝会談を巡る日本とアジア」(7/11)
 レクチャー：「ノーベル平和賞を受賞したICANとPBのつながり」(7/11)
 レクチャー：「おりづるピースガイド～補講～」(7/14)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑥」(7/15)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑦」(7/20)
 レクチャー：「おりづるピースガイド～補講～」(7/21)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑧」(7/27)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑨」(7/28)
 レクチャー：「おりづるピースガイド⑩」(7/29)
 レクチャー：「おりづるピースガイド～補講～」(7/30)
 レクチャー：「被爆2世が語る母への想い」(8/10)
 レクチャー：「「はだしのゲン」のDVDを見て原発を語ろう」(8/11)
 レクチャー：「赤い背中の少年～谷口稜暁さんの被爆体験」(8/13)
 対談：「絵本 my HIROSHIMA」(8/16)

● 詳細

- ホームページ(日) <http://peaceboat.org/projects/hibakusha>
 ホームページ(英) <http://peaceboat.org/english/?page=view&nr=83&type=28&menu=105>
 ブログ(日) <http://ameblo.jp/hibakushaglobal/>
 ヒバクシャ国際署名 <http://hibakusha-appeal.net/index.html>

● メディア掲載情報(一例)

1) 2018年6月10日掲載(イタリア)

38 | **Cultura e Spettacoli** LA NUOVA SARDEGNA DOMENICA 10 GIUGNO 2018

Sbarca la nave con i superstiti di Hiroshima

La "Peace boat" ha attraccato al porto di Cagliari: a bordo gli hibakusha per testimoniare e dire no alle armi atomiche

di Sabrina Zedda
 *CAGLIARI

La cosa che più sorprende osservando i loro volti è lo sguardo sereno accoppiato da un sorriso carico di dolcezza. Sarebbe più facile immaginarli pieni di rabbia gli "hibakusha", i sopravvissuti alle bombe atomiche su Hiroshima e Nagasaki. Invece sono messaggeri di pace, feriscono stati i protagonisti delle iniziative che la Rete italiana per il disarmo, insieme a Senzatomica e a un folto gruppo di organizzazioni territoriali (dalla Rete sarda per la pace al Comitato ricomposizione Rbm), ha organizzato in occasione dell'arrivo della "Peace boat", la nave che ha invitato gli "hibakusha" a un viaggio in cui raccontare la propria esperienza: il ricordo di quel 9 luglio di 73 anni fa, quando alle 8,15, gli Stati Uniti sganciarono la bomba su Hiroshima scatenando una devastazione mai vista prima. I morti furono migliaia, migliaia ancora coloro che per tutta la vita si portarono dietro le conseguenze di quell'attacco. «Molti di noi di noi non ricordano cosa è accaduto quel giorno, ma siamo cresciuti ascoltando i racconti di chi lo ha vissuto, e abbiamo deciso che per evitare di vedere altri hibakusha dovemmo avere altri hibakusha e raccontarli», spiega Ueda Koji, sopravvissuto al bombardamento su Hiroshima. «A

fillo ci spinge anche il senso di responsabilità verso quelli come noi che non ci sono più».

Il racconto avviene davanti a una platea foltissima, raccolta nel Seminario arcivescovile. E non è il solo. Kunimi Terumi, classe 1944, fu esposta alla bomba esplosa su Nagasaki. «Nonostante tutto l'infanzia e l'adolescenza le passai in maniera normale. Ma più tardi, quando stavo per sposarmi, mi venne detto che sarebbe stato meglio fare delle analisi per capire quante radiazioni avevo in corpo. Alla fine il mio fidanzato rifiutò di sposarmi».

Storie che fanno capire l'importanza della campagna "hibakusha" che Rete italiana per il disarmo e Senzatomica stanno portando avanti perché anche l'Italia firmi il Trattato sulla proibizione delle armi nucleari, sottoscritto già da 58 paesi. Un passo di civiltà soprattutto, ricorda uno gli organizzatori della giornata, dopo che il Nobel per la pace l'anno scorso è stato assegnato a una femmina, la campagna internazionale per l'abolizione delle armi nucleari. Un passo importante in particolare nell'Isola, dove gravita la presenza di oltre il 60% delle basi militari stanziate in Italia.

OGGI GAVOI
Il Preludio di Isola delle storie

GAVOI
 Oggi, con la giornata di Preludio, si apre ufficialmente la quindicesima edizione del festival letterario "Isola delle storie", in programma a Gavoi dal 28 giugno sino al primo luglio. A partire dalle 17,30 alle Cortile di Casa Lai, viene presentata la seconda edizione del premio gara di lettura "Crescere leggendo", una giornata tutta dedicata alle scuole e agli studenti che hanno partecipato al progetto realizzato dal festival in collaborazione con l'Istituto comprensivo di Gavoi.

All'incontro parteciperà anche l'Istituto comprensivo "M. Maccioni" di Nuoro. Alle 19, invece, ci si sposta al Museo Comunale per l'attesa inaugurazione dell'esposizione "100 Years" di Hans Peter Feldmann a cura di Luigi Fiaschi e Alberto Salvadori e realizzata grazie alla consolidata collaborazione del festival "Isola delle storie" con il Museo Man di Nuoro.

La mostra - che resterà aperta fino al primo luglio - presenta l'imponente progetto nel quale il fotografo tedesco ha ritratto 101 persone trattate dalla cerchia dei suoi familiari, amici e conoscenti, dagli 8 mesi ai 100 anni, e in cui ogni foto corrisponde a uno specifico anno di età della vita, dalla primissima infanzia alla longeva anzianità. «100 Years» costruisce un appassionato ritratto seriale della vita umana attraverso il tempo, un omaggio corale all'umanità che unisce armonicamente tra loro le dimensioni del passato, del presente e del futuro.

Hans Peter Feldmann



I sopravvissuti di Hiroshima a Cagliari (foto di Mario Rosca)



NACIONAL

Japoneses sobrevivientes de la bomba atómica vinieron a Tiquicia a dar testimonio

"Es el peor infierno que puede vivir un ser humano"

Por: Eduardo Vega. 26 Julio

"Las personas se amarraban con la piel quemada, algunos llevaban en sus manos los ojos que se les habían desprendido de la cara, había cuerpos de todas las edades carbonizados, los árboles fueron arrancados de raíz y los edificios convertidos en polvo.

"Lo único que quería hacer la gente era tirarse al río porque el cuerpo se les quemaba pero el río estaba lleno de muertos y los que tomaron agua murieron al poco tiempo porque estaba contaminada... la bomba atómica es el peor infierno que puede vivir un ser humano". Con la voz quebrada y los ojos cargados de lágrimas, el japonés Jouji Ueda, lleno de dolor, le contó a Costa Rica lo que vivieron él y toda su familia en la Segunda Guerra Mundial.

Ueda nació el 15 de febrero de 1942, tenía tres años cuando el lunes el 6 de agosto de 1945, a las 8:15 de la mañana, una bomba atómica fabricada y tirada por Estados Unidos, que utilizó un avión Boeing B-29 que se llamaba "Enola Gay", cayó sobre la ciudad de Hiroshima, matando inmediatamente a 80 mil personas y otras 70 mil fallecieron hasta finales de 1945. Al diabólico explosivo lo llamaron "Little Boy" (Niño Paquetito).



Kazuo Shimagawa (izquierda), Tarumi Kusumori (centro) y Jouji Ueda, sobrevivientes de la bomba atómica en la Segunda Guerra Mundial que cayeron sobre Japón, luchan porque el mundo elimine esas catastróficas armas. Foto Diana Méndez.

"Mi mamá me cuenta que los heridos eran acomodados, prácticamente tirados, en escuelas e iglesias. Como la mayoría de doctores murieron con la explosión, no había quien los atendiera, entonces se morían lentamente. Hacíamos montañas de muertos para quemarlos y muchas veces al prenderle fuego a una de esas montañas se

SÍGANOS AQUÍ

- Facebook
- Twitter
- Instagram

LO + LEÍDO

- 1 ¿Jefe Benahmí tiene nuevo novio? Este sería el caballero que le robó el corazón
- 2 Joel Campbell critica a Evarado Herrera por cuestionar a Taylor Nieves: 'qué asco dan'
- 3 Omar Cascaente tendría nuevo amor: 'Momoquito ahí le llevo paquito'
- 4 Dudley Lynch, periodista de canal 7 recibió el notición de su vida
- 5 (Video) Director de la Policía de San José defiende actuación de oficiales en broncón con ambulantes

Suscríbese a La Teja

Recibido por \$1.000 por mes

LA TEJA DE HOY

Ver noticias digitales

Ver quinceo digital

5) 2018年7月26日掲載(コスタリカ)

Aug 18, 2018 18 °C

MULTIMEDIOS Edición Costa Rica

Teledirio > Nacional Sucesos Salud Política Internacional Entretenimiento Vialidad

NACIONAL

Google ha cerrado el anuncio

Dejar de ver anuncio ¿Por qué este anuncio? (i)

Sobreviviente de Hiroshima: "Fue un resplandor espeluznante"

Juan Diego Córdoba / Multimedia Agosto 26, Julio 2018 - 10:47 pm

40

Compartidas



En agosto se conmemora el 73 aniversario de los ataques de Hiroshima y Nagasaki.

Un total de 103 sobrevivientes de los ataques de Hiroshima y Nagasaki recorren el mundo en el 'Barco de la Paz', que atraviesa el mundo para impulsar la ratificación del Acuerdo contra las Armas Nucleares, impulsado por Costa Rica en Naciones Unidas.

Un grupo de sobrevivientes ofrecieron un foro en la Universidad Latina de Costa Rica, para contar su historia y llevar su mensaje de paz a los jóvenes costarricenses.

